

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：32623

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370173

研究課題名(和文) 日本文学作品とその映像化に関する文化的考察 川端康成の作品を手がかりに

研究課題名(英文) Cultural Considerations of Japanese Literary Works and Their Filmization Based on the Novels of Yasunari Kawabata

研究代表者

福田 淳子 (FUKUDA, JUNKO)

昭和女子大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：70218923

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：川端康成の作品を中心に、原作小説と国内外での映像化作品とを比較・分析し、国内外での調査をもとに作品内に文化的事象がどのように捉えられているかを検討、文学作品の映像化の意義を考察した。国外では、パリ・フランクフルト・ベルリン・ブリュッセルにおいて日本近代文学作品の映画化作品に関する資料を収集し、映像関係資料館や映画館・劇場等の調査を行った。また、パリ日本文化会館で開催された川端康成展・川端康成原作映画上映会においてアンケート調査を実施し、アントワープにおいては川端康成原作「眠れる美女」をオペラ化した演出家と作曲家に対してインタビュー調査を行い、その成果を学会誌や雑誌に発表した。

研究成果の概要(英文)：I compared and analyzed original novels and their filmized works produced inside and outside Japan, based mainly on literary works of Yasunari Kawabata, and examined how cultural phenomena are projected in filmized works to consider the significance of filmizing literature. I collected foreign documents related to filmized works originated from modern Japanese literature and conducted research at movie-related museums as well as cinemas and theaters in Paris, Frankfurt, Berlin, and Brussels. Furthermore, I conducted a questionnaire survey at an exhibition about Yasunari Kawabata and the screening of movies produced from his novels held at the Japan Cultural Institute in Paris. I also conducted interviews in Antwerp with the director and the composer who together produced an opera out of "House of Sleeping Beauties", an original novel by Yasunari Kawabata, and have published the findings in academic journals and magazines.

研究分野：日本近現代文学

キーワード：日本近代文学 川端康成 原作小説の映像化 原作小説のオペラ化 アダプテーション

### 1. 研究開始当初の背景

文学作品を原作とする映像化は古くから行われており、近現代小説を原作とする映画化は近年特に盛んである。しかし、一昔前のいわゆる“文芸映画”とは様相を異にしている。インターネット等のメディアの発展・普及による弊害の一つに活字離れがあり、小説の映画化が活字離れに荷担しているとも言える。しかし逆に、映像作品やマンガ・アニメーション等によって原作小説を知った視聴者が小説の新たな読者になるという現象も起きており、まさにメディアミックスの複雑な様相を引き起こしている。また、近年、日本各地での映画祭開催や、フィルムコミッションを活用した地域活性化も盛んであり、インターネット等での情報発信により国際的な文化交流をも生んでいる。映画はいまや文化のみならず経済活動にとってもなくてはならないものとなっている。このように、文学と映像とは様々な形で相互に影響を与え合いながら新たな文化を生み出し、経済を動かす原動力ともなっている。同時に、映像作品そのものにも様々な文化が反映され、享受者はそれを吸収しているのである。

しかし、このような文学と映像の相互の影響関係、あるいは文学作品や映像作品の海外での受容状況や影響関係に関する研究はあまり進んでいない。そこで、ノーベル賞受賞作家として海外での翻訳も多く、近代文学作家の中でも国内外での原作小説の映像化が40作以上と特に多い川端康成を対象に、文学作品の映像化を調査・研究し、文学作品と映像作品との影響関係を考察するに至った。映像化によって切り捨てられたもの、逆に掬い上げられたもの等を探り、活字と映像による隠れたネットワークを探りながら、文化や思想など影響関係を考察する必要があると考えたことが、本研究のテーマの背景にある。

### 2. 研究の目的

海外における日本文学作品の映像化を題材として、小説に描かれた死生観・ジェンダー観・性意識等が映像を通してどのように表現されているのかを分析し、我が国の文化および思想との相違を明らかにするとともに、海外での日本文学の享受のされ方、文学作品の映像化の意義等を考察する。その際、日本文学作家の中でも映像化の多い川端康成の作品を主な対象とし、数ある映像作品の中でも海外の多くの芸術家に影響を与え続けている小説「眠れる美女」を中心に考察を進める。日本国内で二度、海外で三度(フランス・ドイツ・オーストラリア)映画化された同作品のそれぞれのストーリーおよび映像を分析、さらに国内外での評価や研究資料を調査・収集し、日本文学およびその映像化による文化的役割を明らかにする。

### 3. 研究の方法

(1)国内・国外において映像化された近現代

日本文学作品の原作者および原作小説について、特に川端康成を中心に調査を進め、小説の読解、映像化作品の分析を行う。

(2)作家および小説作品と映像化作品に関する国内外の基礎資料を調査し、文献を収集する。作家に関しては、映像化作品の関連資料および映像に関わる発言等の文献資料を収集する。映像化作品に関しては、国内においては単行本のほか雑誌・新聞・パンフレット等を中心に、映像関連資料の収集を行う。国内においては、図書館・資料館・映画資料室等を利用し、明治末期から現代に至るまでの文献調査および文献収集を行う。必要な文献は順次購入する。

(3)国外の映像資料については、インターネットやEメール等を利用して図書館・資料館等の資料所蔵調査を行い、映画館の調査や映画上映情報、文化状況等について可能な限り現地調査を行う。特に、フランスは日本文学作品の映画化が多く、近年日本文化の吸収が盛んであることと、平成26年9月～10月にかけてパリ日本文化会館において川端康成に関する展覧会・記念講演会・国際シンポジウム・川端康成原作映画上映会が予定されていることから、現地調査を実施する。

### 4. 研究成果

(1)日本の近現代小説作品を原作とする映像化作品、特に川端康成原作の映像化作品を中心に調査と資料収集を行った。また、映像化された小説の読解と映像作品の分析を行った。

川端康成原作小説の映画化作品について、平成29年3月現在で判明しているものは47作品ある。平成28年には「古都」が映画化されて12月には全国公開されたが、内容は原作小説の後日譚であり、現在でも様々な形で映像化が続いている。

川端康成原作「眠れる美女」に関しては、国内では昭和46年版と平成7年版、国外ではフランス版(平成6年)・ドイツ版(平成17年)・オーストラリア版(平成22年)の合計5回の映画化がある。吉村公三郎監督による昭和46年版に関してはデジタル化がなされていないため、上映される機会が少なく、VHS・DVDの販売もないため視聴が困難であるが、平成26年10月にパリ日本文化会館で開催された川端康成原作映画上映会において上映されたほか、平成28年11月に東京都写真美術館ホールにおいて「眠れる美女」のオペラ化関連事業として開催された「眠れる美女」特別上映会で改めて観る機会を得、調査を進めることができた。

国内でのみ6回の映画化がある「伊豆の踊子」と比較すると、国外での映画化がある作品とは明らかに作品の質に違いがある。「伊豆の踊子」はむしろ日本の映画史や芸能史をたどる好材料でもあり、文化状況のみならず

社会情勢をも映し見ることができる。「眠れる美女」のほかに「美しさと哀しみと」が国外（フランス）で映画化されており、両作品に共通するのは広く人間が抱え持つ普遍的なテーマの内包であり、多くの芸術家に影響を与えてきた所以である。このことは(3)に記すオペラ化という、映像とは別の視点からも証明されることになった。

(2)国内においては、上記に示した「研究方法(2)」に基づいて調査を実施し、主に以下の成果を得た。しかし、研究目的に対して明確な結論を出すためには必ずしも十分な結果が得られておらず、継続調査が必要である。成果報告と併せて今後の展望を記す。

近代美術館フィルムセンター、松竹大谷図書館、東映京都スタジオ映画文化館展示室・映画資料室、京都文化博物館等において、映像資料の所蔵確認や文献調査等を行った。川端康成原作映画 47 作品中、「浅草紅団」・「女性開眼」・「虹いくたび」など未だ所在不明のものがあり、継続調査が必要である。また、今回の調査でいくつか所在が明らかとなった映像作品があるが、デジタル化がなされていないために視聴が困難な作品が多いことが分かった。シナリオや台本が収集できた作品については、分析を進行中であり、論文執筆には至らなかった。映像分析等も含めて今後も調査を継続し、論文を発表していく。

平成 28 年 5 月 22 日、京都映画芸術文化研究所（おもちゃ映画ミュージアム）において、川端康成が浅草居住時に視聴した 1930（昭和 5）年公開の無声映画「何が彼女をそうさせたか」上映会に参加し、川端の同時代映画調査を行った。浅草常盤館で 5 週連続上映された本作は、プロレタリア作家藤森成吉の戯曲を鈴木重吉がシナリオ・監督を担当した傾向映画で、「キネマ旬報」ベスト 1 に選ばれ、川端もいくつかの随筆の中で言及している。このフィルムは長年行方不明で幻の日本映画とされていたが、23 年前にロシアで発見され、京都映画芸術文化研究所の太田米男氏が復元した。文学作品を原作とした映像作品に関して、同時代の発言に基づく調査も課題の一つであり、今回の弁士・音楽付きの上映会は貴重なきっかけとなった。今後も継続して埋もれた作品の発掘に努め、研究結果を公開していきたい。

(3) 国外においては、上記に示した「研究方法(3)」に基づいて調査を実施し、主に以下の成果を得た。新たな課題が発生したものもあり、成果報告と併せて今後の展望を記す。

平成 26 年 9 月と 10 月の二度にわたりパリに出張し、国外で初めて開催される一ヶ月半に及ぶ川端康成展と川端原作映画上映会の調査を行い、またヨーロッパで初めての川端の国際シンポジウムに参加した。

展覧会までの準備期間を利用して、パリ文

化会館の図書室や資料室において雑誌・新聞等に掲載された映画に関するレビュー等を調査し、複写を行った。また、シネマテーク・フランセーズにおいて日本映画および川端原作映画作品のプレス資料やレビューの複写を行い、パリ市内の映画館の所在調査や上映作品、入場者等の調査を行ったほか、資料館等の現地調査を行った。日本文学作品の映像化に対する国外での文献資料については調査が進んでおらず、新たな資料の入手により、研究の広がりが予想される。今後、翻訳作業を進め、論文執筆に生かしていく予定である。

川端康成展は、9 月 16 日から 10 月 31 日まで開催された。オープン前日から 9 月 21 日にわたって調査を実施、展示の準備の見学や写真撮影を行い、作成したアンケートを受付に設置した。入場無料で、展示方法は簡素、他の行事目的で訪れる来館者も気軽に立ち寄って見学できるような状況であった。展覧会のオープン後は、参与観察のほか、関係者に対してインタビューを行い、来館した日本人にも聞き取り調査を行った。海外では日本人作家の展覧会はほとんど行われないため、日本のことを改めて知る貴重な機会だという。川端原作小説の映画化作品があることもあまり知られていないことが分かった。パリ日本文化会館の調査によれば、会期中の来場者数は約 16,038 名であり、一日平均にすると約 500 名であった。

川端康成原作映画上映会は 10 月 4 日から 10 日間にわたって開催された。上映された作品は 11 作品、そのうち 10 月 23 日「日も月も」・「山の音」、24 日「眠れる美女」の上映会に出席し、会場や客席の写真撮影、参与観察、入口でのアンケート配布・回収を行った。パリ日本文化会館ではフランス語字幕を独自で付けている。上映中の参与観察では、思いもよらないところで笑いが起きるなど、文化的背景および映像表現に対する受け止め方の相違が看取できた。同館での上映作品を複数回にわたって鑑賞している来場者も多く、川端作品への関心の深さが窺えた。

来場者の年齢層は幅広いが、高齢者が多いのが特徴である。アンケートは、記号選択と自由記述を設け、自由記述欄の回答も多く得られた。映画に関しては、11 作品の 22 回上映で入場者数約 2,000 名に対して 103 部を回収。単純集計を行い、自由記述欄のフランス語翻訳を行った。日本人作家一人に対して一ヶ月半の長きに及ぶ展覧会は世界初であり、日本でも視聴困難な作品を含む映画上映会もまた同様である。その意味でも今回実施したアンケート調査は大変貴重なものであった。今後、クロス集計、自由記述欄のアフターコーディング等を行い、更なる分析を重ねた形で、平成 29 年度中に論文を公開する予定である。

ドイツ版映画「眠れる美女」に関連した調

査として、平成 28 年 9 月 9 日から 14 日までドイツに出張し、フランクフルトとベルリンにおいて資料館・映画館・劇場等を調査し、文化状況についての参与観察・実地踏査を行った。また、ドイツ版映画「眠れる美女」が制作された事務所の住所を訪ね、現場確認を行った。

フランクフルトでは、メイン川沿いの資料館・博物館等で調査を実施した。ドイツ映画博物館の資料展示室は、自分で触れる・覗く・観る、体験型の展示が豊富であり、映画の制作・撮影に視点を置いた展示が特徴の一つである。パリのシネマテーク・フランセーズ映画博物館やジェローム・セドゥー＝パテ財団の資料展示室等、実際に触れることのできない展示に比べると対照的であり、映像制作寄りの展示は日本にも例がないと思われる。子供から大人まで幅広い年齢層を対象に、映像について様々な角度から幅広く身近に捉えることができるのが大きな特徴である。フランクフルト情報通信博物館は、コミュニケーション・ツールとして文字の発明から始まり、電話・郵便・ラジオ・テレビ・映画・インターネットに至るまで、コミュニケーション、情報、通信の歴史を様々な角度から展示した博物館である。これらの展示にとどまらず、グループミーティングルームや、情報通信を遊びながら学べる子供用のフロア、ピン詰めの手紙の展示室、特別企画展のフロアなどがあり、情報通信をテーマに幅広い年齢層で様々な活動が可能な場所でもある。教会やオペラ劇場のある街の中心部においては、日本では堅苦しく捉えられがちなクラシック音楽やオペラが、日常的に自然に溶け込んでいる場を複数回目にし、音楽文化の違いが実感できた。これらの調査から、メディア文化に対する日本との認識の違いを考察することができた。

ベルリンでは、ソニーセンター内の映画博物館やドイツ歴史博物館等を調査した。前者はドイツ映画の歴史や著名な俳優の紹介などの展示が中心であり、後者は古代から現代に至るまでテーマごとに順を追って幅広く展示しており、日本にも大きな影響を与えたドイツ表現主義など映画に関する展示が確認できた。

また、ドイツ版「眠れる美女」はベルリンで撮影されており、監督と共同制作者がベルリン在住であったため映画情報で探索した事務所を訪ねた。監督ヴァディム・グロウナは 2012 年 1 月に死去、配偶者も死去しており、共同制作者レイモンド・タラベイの所在も現時点では不明、事前調査した住所にも事務所は存在しないことが確認できた。映画関係者の探索やロケ地の調査には至らなかったため、今後の課題である。

平成 28 年 9 月 14 日から 17 日まで、ベルギーのブリュッセルおよびアントワープで資料館・博物館・映画館・劇場等の調査を実

施した。ブリュッセルでは、モネ劇場や周辺の映画館、楽器博物館、古典美術館等において、文化状況の参与観察・実地踏査を行った。アントワープでは、東京文化会館の協力を得て、オペラの演出家ギー・カシアス氏と作曲家クリス・デフォート氏に対するインタビュー調査を行った。

これらの調査は、平成 28 年 12 月に川端康成原作「眠れる美女」のオペラ化作品が日本において初演されることが判明したための新たな追加調査である。オペラ「眠れる美女」は 2009 年にブリュッセルのモネ劇場で初演されているが、今回の日本上演に合わせて新たに日本バージョンが制作された。演出家と作曲家に対するインタビュー結果については、調査の一部を「音脈」(2017、東京都歴史文化財団・東京文化会館発行)に発表し、小説「眠れる美女」が芸術家に与える影響力に関する貴重な証言として報告することができた。

オペラ「眠れる美女」は、川端自身が強く関心を寄せ続けていた舞踊を採り入れた現代オペラであり、小説の映像化(視覚化)作品として分析・調査する意義は大きい。日本では行われなかったオペラ化という新たなアダプテーションであり、映画化とともに小説の視覚化・聴覚化の問題として考察することは、多くの芸術家に影響を与え続けている小説「眠れる美女」および川端康成の作家的本質の解明により迫ることになる。今後、上演されたオペラ作品の分析調査を行い、文学作品のオペラ化について継続して考察を進めていきたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

福田 淳子、Interview01 東京文化会館開館 55 周年・日本ベルギー友好 150 周年記念オペラ「眠れる美女～House of the Sleeping Beauties～」クリス・デフォート(作曲・台本)&ギー・カシアス(演出・台本)、「音脈」(公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化会館) WINTER 65、2016、2 - 3、査読無

福田 淳子、「本因坊名人引退碁観戦記」から小説『名人』へ 川端康成と戦時下における新聞のメディア戦略、「学苑 人間社会学部紀要」(昭和女子大学) 904 号、2016、52 - 67、査読有

福田 淳子、杵淵由香、堀内京、佐藤翔哉、川端康成文学館 所蔵 未発表書簡二通(横光利一宛、文学界宛)をめぐって、『川端文学への視界』(川端康成学会年報、銀の鈴社) No.30、2015、8 - 23、査読有

福田 淳子、二〇一四年、パリでの川端康成展・国際シンポジウム・川端原作映画上映会など、『川端文学への視界』（川端康成学会年報、銀の鈴社）No.30、2015、78 - 91、査読有

〔学会発表〕(計2件)

福田 淳子、川端康成と映画「眠れる美女」、東京文化会館（公益財団法人東京都歴史文化財団）主催 映画「眠れる美女」特別上映会、2016年11月4日、東京都写真美術館ホール（東京都目黒区）

福田 淳子、「茨木市立川端康成文学館」収蔵資料について、川端康成学会第41回大会、2014年6月22日、二松学舎大学（東京都千代田区）

〔図書〕(計1件)

福田 淳子、東京文化会館（公益財団法人東京都歴史文化財団）発行、インタビュー：ギー・カシアス&クリス・デフォート（再掲） 川端康成と小説「眠れる美女」、東京文化会館（公益財団法人東京都歴史文化財団）編、『オペラ「眠れる美女～House of the Sleeping Beauties～」公演プログラム』、2016、14 - 20

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

福田 淳子 (FUKUDA, Junko)

昭和女子大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：70218923